

おくしんでんにしこふん
奥新田西古墳発掘調査報告書

平成12年12月

加古川市教育委員会

序 文

加古川市は豊かな自然に恵まれ、近年では播磨臨海工業地域の一員としても発展しています。

市域には 620 もの埋蔵文化財が存在していますが、その中でも後期古墳は、窯跡と並び最も数の多い遺跡のひとつです。

今回、そのうちの一基である奥新田西古墳が発掘調査されました。この古墳は山陽自動車道サービスエリアの駐車場建設工事に伴って事前に調査されることになり、平成 9 年に発掘調査が実施されました。本書はその結果をまとめた報告書です。この報告書が当市の古墳時代を理解するうえで一助となれば幸いです。

また、調査にあたってご指導、ご協力いただきました兵庫県教育委員会や加古川市文化財審議委員会ならびに地元関係者の方々に対して深い謝意を表します。

平成 12 年 12 月

加古川市教育長

松 本 翔

例　　言

1. 本報告は山陽自動車道サービスエリア駐車場の建設工事にともなって平成 9 年に実施された、奥新田西古墳の発掘調査報告書である。
2. 調査場所は兵庫県加古川市平荘町中山 896~907・1 である。
3. 発掘調査は平成 9 年 2 月 17 日から 4 月 20 日まで実施した。
4. 調査主体は加古川市教育委員会である。

調査主体者　　松本 節 加古川市教育長

調査担当者　　岡本一士 加古川市教育委員会 生涯学習推進室 副課長
西川英樹 加古川市教育委員会 生涯学習推進室 学芸員

5. 本書は以下の分担で作成した。

遺物整理　　西川英樹・西村秀子

製図・トレース　西川英樹・西村秀子・佐藤敦子

報告書執筆　　西川英樹

校正　　天尾 宏

6. 調査および報告書作成に際して、下記の方々からご指導・ご教示を賜った。記して感謝します。

工楽普通 (ユネスコ・アジア文化センター)　　岸本一宏 (兵庫県教育委員会)

中村 弘 (兵庫県教育委員会)　　永井信弘 (加西市教育委員会)

渡辺智恵美 (元興寺文化財研究所)　　菅井裕子 (元興寺文化財研究所)

中越正子 (元興寺文化財研究所)

本文目次

第1章 発掘調査に至る経過	1
第2章 遺跡の位置と歴史的環境	2
第3章 発掘調査の成果	5
第1項 外形・墳丘	5
第2項 石室	6
第3項 構築	7
第4章 出土遺物	9
第1項 土器	9
第2項 金属器	10
第3項 玉類	11
第5章 奥新田西古墳出土耳環の自然科学的調査	12
第6章 まとめ	15

挿図目次

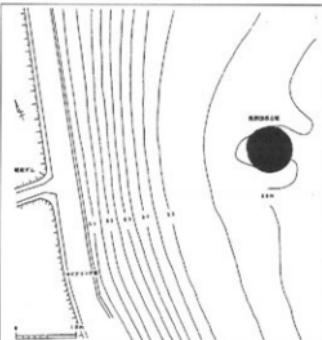
第1図 加古川市位地図	1
第2図 奥新田西古墳位地図	1
第3図 周辺遺跡分布図	4
第4図 墳丘全景実測図	20
第5図 石室図	21
第6図 墳丘土層図	22
第7図 石室遺物出土状況	26
第8図 出出土器実測図	27
第9図 金属器・玉類図面	28
第10図 出出土器観察表	29
第11図 石室比較図	30

第1章 発掘調査に至る経過

平成7年10月に加古川市公園緑地課から市教育委員会に対して、同市平荘町中山における駐車場建設の予定地内に奥新田西古墳が存在するため、取り扱いについて協議の申し入れがあった。当地の近くでは、すでに山陽自動車道の建設工事が進んでおり、加古川市はこの自動車道に隣接するサービスエリアの建設を計画していた。その駐車場の位置が当古墳の範囲に入っていた。奥新田西古墳は小丘陵上に築かれた円墳であったが、持ち送りの大きな横穴式石室が遺存するなど、希少価値のある古墳と考えられた。そのため、加古川市教育委員会では保存について公園緑地課と協議を重ねた。しかし、設計変更は困難であるとして、記録保存を求められた。市教委はその後も協議を重ね、盛り土保存という形で決着した。発掘調査は加古川市教育委員会が主体となり、平成9年2月17日から4月20日まで行った。調査員は市教委生涯学習推進室文化財担当職員 岡本一士・西川英樹である。出土遺物は加古川総合文化センターにおいて整理し主に西川英樹、西村秀子、佐藤敦子が作業を行った。また、出土した金属製品は(財)元興寺文化財研究所に保存処理を委託した。また、耳環については、元興寺文化財研究所に分析を依頼し玉稿をいただいた。



第1図 加古川市位地図



第2図 奥新田西古墳位地図(上下)

第2章 遺跡の位置と歴史的環境

加古川市は兵庫県播磨地方に所在する人口約27万人の地方都市である。東は明石市、稻美町、播磨町と接し、西は高砂市、姫路市、北は加西市、小野市、三木市と接している。市名の由来となった加古川は流域面積1,835km²、全長86.5kmを誇る兵庫県下最大の河川で、本市を南北に貫流し、播磨灘に注いでいる。

市域の地形的特徴を見ると東岸側には段丘、洪積台地が広く分布しており、西岸側には山地が多い。沖積低地は市域南部の加古川氾濫原地帯に広がっている。北部では加古川沿いや支流の曇川、草谷川沿いに細長い谷底低地を形成している。また、市域における山地の地質は基本的に流紋岩質溶結凝灰岩である。志方町の一部のみ花崗岩を産出する。

奥新田西古墳周囲の平莊町北部は平野に乏しい山間地で、その谷間には狭い谷底低地が複雑に形成されている。当古墳は低地内に形成された独立小丘陵の最上部に築かれている。また、北東方向には県道をはさんで、2基の円墳からなる奥新田東古墳群も存在する。この古墳群は平成7年度に兵庫県教育委員会による発掘調査が実施された。報告によれば1号墳、2号墳ともに横穴式石室を内部主体にもつ円墳で、築造時期は7世紀であるという(1)。

遺跡分布図を見ると、当古墳の周辺には古墳群が点在している状況がうかがわれる。天坊山古墳のような豎穴式石室を主体部にもつ前期の円墳もあるが、その多くは後期以降の群集墳で、1~数基程度の小規模な群が目立つ。北から述べると、野尻古墳群(3基)、大龜谷山古墳(1基)、中山古墳群(3基)、上原古墳群(2基)、八つ仏古墳群(3基)などで、およそ1~1.5kmほどの距離で点在している。また、当墳から北側では加西市に新村古墳群、赤松の尾古墳群、糠塚山古墳群、堀山古墳群、状覚山古墳群などが築かれている。

平莊のもので発掘調査されたものは少ないが、中山古墳群は権現ダム建設工事に伴って調査され(2)、6世紀中葉から7世紀にかけて築造された横穴式石室の古墳群であることが判明した。1号墳は両袖式で、石室全長約9.9m、玄室長約5m、玄室奥壁幅約1.7m、玄室高約2mの規模である。古くから盗掘されていたため、遺物は出土しなかった。この石室は現在加古川総合文化センターに移築展示されている。3号墳は1・2号墳から400m離れて1基だけで築かれていた。石室は片袖式で、出土した須恵器から6世紀中葉の築造と考えられている。しかし、調査後の報告書が刊行されていないため、詳細については不明な点も多い。

堀山古墳群と状覚山古墳群は万願寺川南岸に近い丘陵上に築かれている。その中でも平成5年に調査された状覚山4号墳は6世紀前半の築造とされ(3)、片袖式の横穴式石室である。当古墳からは北へ約2kmの距離にある。

一方、平荘町南部の平荘湖周辺には、約70基からなる平荘湖古墳群が形成されている。昭和41年に平荘湖ダム建設工事に伴って20数基が発掘調査された。中でも池尻19号墳は平荘湖でも古い横穴式石室である。片袖式で、玄室長約3.45m、玄室幅約2.2mでやや幅広の長方形となる平面プランをもっている。平荘湖周辺では、6世紀中頃から7世紀にかけて、多くの横穴式石室をもつ古墳が築造され、加古川西岸における造墓活動の中心地域となった(4)。

当古墳周囲の集落遺跡についてはほとんど不明であるが、権現池の北西には弥生～古墳の土器散布地である権現池遺跡があり、同池の東南には須恵器が散布する上原遺跡がある。

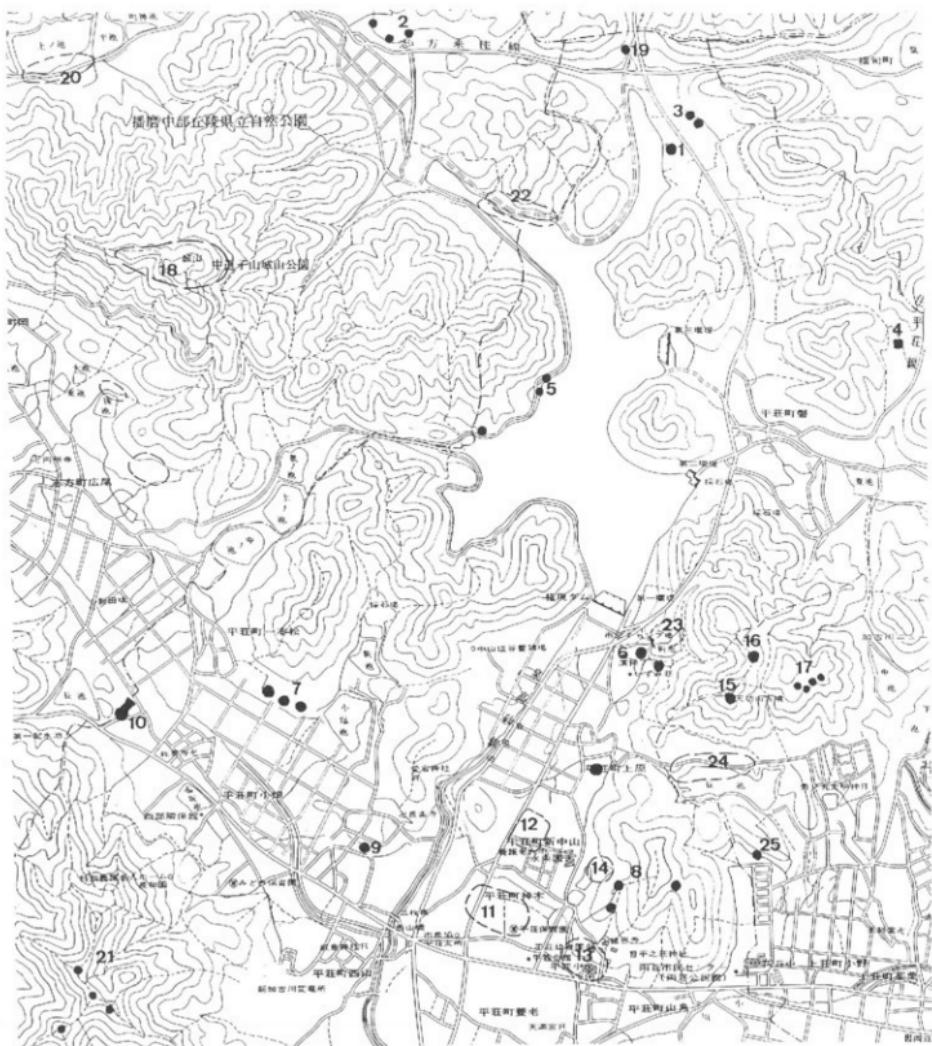
周辺には少数ながら窯跡も分布している。奥新田西古墳の北側、加西市との境付近には奥新田窯跡が確認されている。また、野尻古墳群の北側には尾根を隔てて虎ガ谷窯跡群4基が確認されている。これは奈良時代の窯跡と考えられている。

奈良時代の集落跡としては南側の権現川東岸に神木遺跡が存在する。また、平荘小学校付近には、古式な塔心礎が残る山角庵寺が所在する。

中世の遺跡としては神木構居跡が存在する。この構居は播磨鑑に「長さ三十間、横二十八間、平ノ荘神木村、村より二丁南の方。領主は高橋平左衛門 天正の頃志方の幕下也」との記述が残されている。

注

- (1) 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 岸本一宏氏より教示
- (2) 「中山古墳群」『加古川市史第4巻 1996年』
- (3) 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 岸本一宏、平田博幸氏より教示
- (4) 山崎信二「横穴式石室構造の地域別比較研究 1984年」
榎本誠一「播磨の大型石室墳」『播磨考古学論叢 1990年』
山本祐作「兵庫県加古川下流域の後期古墳の動向」『西谷貞治先生古稀記念論文集 1993年』
「平荘湖古墳群」「升田山15号墳」「池尻16号墳」『加古川市史第4巻 1996年』



第3図 周辺遺跡分布図(S = 1/22, 000)

- 1 奥新田西古墳 2 野尻古墳群 3 奥新田東1・2号墳 4 大龜谷山古墳 5 中山古墳群 6 上原古墳群 7 八つ仏古墳群 8 印南山古墳群 9 小畠1号墳 10 小畠古墳(広尾二塚古墳)
- 11 神木遺跡 12 神木構居跡 13 山角廃寺 14 嶺上の池遺跡 15 天坊山1号墳 16 天坊山2号墳 17 地獄谷古墳群 18 中道子山城跡 19 奥新田窓跡 20 上の池遺跡 21 飯盛山古墳群 22 権現池遺跡 23 上原遺跡 24 長池遺跡 25 助谷古墓

第3章 発掘調査の成果

第1項 外形・墳丘

奥新田西古墳は、権現ダムの北側に位置し、標高約56mほどの小丘陵上に位置する。丘陵西側の傾斜変換点付近に位置し、現況地形の高所に築かれている。埋葬施設は右片袖式の横穴式石室で、西側(28°N)の方向に開口している。西側からの見通しは良好である。当墳から北東の位置に県道を隔てて奥新田東古墳群2基が築かれている他は、付近に古墳は築かれていません。

古墳の周辺は後世の土取りのため、北側や東側が削平されており、墳丘の遺存状態は必ずしも良好とは言えない。墳頂部は現状で標高58.6mの高さがあり、墳丘上部は天井石と若干の封土が残されているが、露出する天井石の状況や墳丘表土層の堆積状況から、多くが流出したと考えられる。

墳丘西側は半切したように大きく削り取られていて、そのためか、横穴式石室の羨道はかなり短いものであった。現況の羨道長は南側壁側で約1.3m、北側壁側で約1.5mである。前庭部も全体に削平されているため明確に検出出来なかった。南側の墳丘も削り取られて多くが破壊されており、本来の規模よりかなり縮小していた。現状の南側墳丘裾は左側壁内壁から3.5~3.8m程度しか残っていないかった。また、現状の東側墳丘裾には幅60cmほどの溝が巡っていたが、この溝の埋土にはガラス片や陶磁器の破片なども含まれていた。

墳丘下の東側から南側では、推定墳丘裾ラインに沿うようにゆるく弧を描いて延びる溝が検出された。墳丘は土取りにより失われているが、位置や形状からこの古墳にともなう周溝と考えられた。

溝幅は各所によりかなりのばらつきがあり、東側では細くなるが、南側の平均で約4mほどである。この溝は円弧を描きながら、墳丘南西側付近まで続いている。また、この溝から標高51m地点まで続く溝の流れも認められた。

周溝は墳丘下の東側では削平のため最大幅約2mと狭まり、北側では土取りによる削平のため、検出されなかった。

古墳の規模は、比較的墳丘がよく残されている北側の墳丘裾や周溝などから考えると、径約15m程度の円墳と推定される。

石室は奥壁上部が崩落し、天井石も奥側で一部が失われていた。そのため、調査開始前においてはまるで両端が開口しているかのような外観を呈していた。玄室内部には、崩落した天井石と考えられる石材や奥壁石と考えられる石材、側壁石等が積み重なって堆積していた。石材間に堆積していた土砂も崩れた古墳の封土と考えられた。

その他、葺石・外護列石や埴輪等はまったく検出されなかった。

第2項 石室

主体部は右片袖式の横穴式石室である。主軸は W28° N である。羨道は破壊を被っているが石室全長は約 5m である。各部は玄室長約 3.5m、奥壁幅約 2.2~2.3 m、羨道南側壁長約 1.3m、同北側壁長約 1.5m、羨道幅約 1.4m である。

石室は奥壁上部とそれに接する両側壁上部、及び玄室天井石の一部が失われていた。天井石は現状で長さ約 1.4m、幅約 1.6m、高さ約 36cm の石と、前壁よりに 45cm ほどの長さが玄室内に残しているが、玄室奥部の天井石は失われていた。

石室は発掘当初から開口していたが、玄室内からは中世の羽釜なども出土しており、かなり以前から開口していたようである。地元の人の話によれば、昔は遊興のためにも使われていたと言う。

玄室内には崩落した石材が折り重なるように堆積し、床面から 30~50cm ほどが土砂に埋もれていた。それらの土砂に混じって火を焚いた痕跡や炭屑などが所々で発見された。出土遺物は完形のものはひとつもなく、完全に復元できる個体も存在しなかった。遺物の盗掘はかなり行われたものと思われる。

石室は玄室幅が広い長方形のプランである。玄室幅指数は 63 で、第 2 形式に属する(1)。側壁は少しづつ前方にせり出しながら積んでおり、持ち送りが大きいことが特徴である。左側壁で 8~9 段と多段に積んでいた。比較的小型の石材が使用される傾向があった。

天井石と接する最上段では板石状の石材を使用して安定化を図っていた。現存する天井石の大きさは、幅約 1.6m、高さ約 36 cm で、これも小型の天井石と言えるだろう。天井幅は計測した箇所で約 75cm~95cm となっており、玄室奥壁幅との差は大きい。

見上げ石は 3 段に積まれ、前壁構造をなす。右側壁と前壁が接する部分には斜めに構架される石材が上まで存在した。見上げ石の上段は両側壁を斜めに渡して設置しており、隅を完全に消していた。前壁と側壁は同時に並行して積み上げられたと考えられる。

また、奥壁に接する左側壁2段目より上と右側壁4段目より上も斜めに渡して積んでいた。

奥壁はおおむね高さ約30~40cm、幅約50~60cm、奥行き約60~90cmほどの小振りの石を小口積みしていた。基底石は4石で構成され、現況で4段目程度まで遺存していた。持ち送りは最上段にわずかに見られる。

袖石は大型の方形石材を3段積んでいた。基底石は高さ約48cm、2段目は高さ約60cm、3段目は約62cmである。羨道はかなり短く、現存する長さは南側で約1.8m、北側で約1.5mであった。羨道の先に浅いくぼみがあったが、抜き取り穴とは断定できなかった。これを抜き取り穴とすると羨道長は約2.8mとなる。この先は後世の開墾や開発のため地面が大きく傾斜しており、検出できなかった。羨道の幅は約1.4mであった。玄室幅は約2.2m程であるから羨道幅指数は約64となる。

第3項 構築

古墳の築造にあたっては、まず地山である黄橙色粘質土を約40~70cm程度削り出していた。墓坑は地山整形後に、再度掘削を行っていた。掘り方の規模は長さ約7m(現況)、幅約3.7mでコ字状(平面形)に掘りこんでいるが、袖部は石室の形に合わせて内側に屈曲させていた。

ついで、基底石の据え付けを行ったと考えられる。基底石は側壁では長手面を石室内側に向け、奥壁は小口面を石室内側に向けていた。基底石の下側には掘りこみを行い、安定化を図っていた。そして、墓坑内の奥壁石及び側壁石の背後の埋土には黄橙色粗砂が入っていたが、観察した個所ではあまり強く突き固めてはいなかった。埋土には削り出した地山土と掘り方を掘削した土を使用したものと思われる。

側壁石は後ろの長さが計測した場所で平均70~80cmほどであった。概ね4段目以上はせり出しによる持ち送りが大きくなる傾向がある。奥壁は小型の石材を小口積みしていたが、計測できたもので平均60~90cmほどの縦長の石を使用していた。

石材は一段積むごとに背後の盛り土を行い、その上段の石を積み上げていったと考えられる。そして、石積みの最上段に天井石が乗せられた。玄室天井石は2石だけ残存していた。天井石と側壁石の間には板石が置かれ、安定化が図られていた。天井石の周囲からその上部にかけて、さらに盛り土が行われたと考えられるが、現状では、天井石より上の封土は多くが流出しないし破壊により失われていた。

古墳の封土には、主に地山である黄橙色粘質土まじり灰白色シルト質細砂と旧表土であ

る明黄褐色粘質土、及び両者を混ぜた土を使用していた。さらに墳丘外側では、しまりのない褐灰色砂質土も多く使用されていた。石室北側の壁面観察では、この砂質土及びその外側の浅黄橙色土の観察で、盛り土の単位を把握することができた(第6図)。

当古墳の玄室高が約3.1m程度と高く、せり出しによる持ち送りが顕著であることと、小ぶりな天井石を使用していることは相互に関連する現象であると言えるだろう。当古墳の石室に関しては、古い構築技法の伝統がうかがわれる。

参考文献

- (1) 白石太一郎 「畿内の後期大型群集墳に関する一試考」『古代学研究42・43号』

第4章 出土遺物

第1項 土器

奥新田西古墳は盜掘や撹乱を受けたため、石室内部の遺物は原位置をとどめていないものばかりであった。土器はすべて破片であり、また、完全に復元できる個体は発見されなかった。土器は可能なかぎりにおいて図化を試みたが、細片のため、図示できなかったものもある。全体的に出土量は、他の一般的な後期古墳に比べても少ないと見えるであろう。それは撹乱を受けているということもあるが、後述するように当古墳の使用時間が短かったことと関係があるものと思われる。

図示したものは古墳に伴う遺物の他に、土師器壺、中世の羽釜などもある。

須恵器（第8図）

壺 蓋と身が出土している。1、2は蓋である。1は天井部を欠いている。残存する部分の観察では、回転ヘラケズリが施されている。残りの箇所は回転ナデである。口縁端部には内傾する段をもつ。ロクロは左回りである。

2は天井部外面に回転ヘラケズリを施している。口縁端部は丸く仕上げている。ロクロは左回りである。天井頂部を欠いている。

3～7は身である。3は、立ちあがり部分を欠いている。底部外面には1/3程度の回転ヘラケズリを施している。底部内面には同心円文が認められる。それ以外の箇所は、内外面ともに回転ナデで仕上げている。4は底部を欠く資料である。残存する底部外面は、回転ヘラケズリを施している。それ以外の箇所は、内外面とも回転ナデである。5も底部を欠いている。体部は回転ナデで仕上げている。6も底部を欠いている。体部は回転ナデで仕上げている。7は底部外面に回転ヘラケズリを施している。底部内面には同心円文が認められる。それ以外の箇所は、内外面ともに回転ナデで仕上げている。

壺 8は短頸壺である。口縁部及び体部は、回転ナデで仕上げている。外面底部は回転ヘラケズリを施している。

9は壺である。体部下半分は失われている。外反する口縁部、内外面ともに回転ナデ調整である。口縁端部には面を持たない。

10は脚付長頸壺である。口縁部には蓋受けの立ちあがりを有する。頸部と肩部には退化

した櫛描波状文を施す。脚部には3方向に2段の三角形透かし孔をうがっている。

11は脚付短頸壺である。体部外面には回転力キ目を施す。底部外面は回転ヘラケズリで仕上げる。脚台は、内外面ともに回転ナデである。脚端部は欠失している。

高坏 12は無蓋高坏である。長脚で、脚裾部は大きく開く。脚柱部は3方1段透かしで、回転力キ目を施している。脚裾部はナデ調整である。脚端部は丸く仕上げている。坏部は中央に稜を持ち、その下に刻み目文を施す。また、底部外面にも回転力キ目を施している。口縁は外傾し、端部は丸みをおびる。

提瓶 13は提瓶である。扁平な円球形の体部に短い口縁部をつけている。口縁部は大きく外反し、端部はすこし丸みをおびる。調整は回転ナデである。体部の突起は失われているが、取れた痕跡が見当たらないことから最初からなかったと思われる。外面には濃緑色の自然釉が厚く付着する。また、部分的に灰かぶりが認められる。体部の調整はカキ目と思われるが、表面剥離のため観察しにくい。背面は平らにつくっており、ナデ調整を施している。

土師器・瓦質土器

甕 14は土師質の甕である。口縁はくの字にたち上がり、端部には面をもつ。接合できなかった胴部の破片には、右上がりの粗いタキメが施されていた。玄門付近より破片が出土した。底部は出土していない。鍋と見てもよいかもしれない。再利用時の遺物と考えられる。

羽釜 15は羽釜である。石室の玄門付近の埋土より出土した。口縁部は内湾し、長い鉗を取りつけている。両面に黒く炭素が付着しており、瓦質と考えられる。口縁部には外耳を取りつけている。これも中世の再利用時の遺物と考えられる。

第2項 金属器

第9図は金属器である。16は鉄鎌である。全長5.4cm、鎌身長4.7cm、鎌身最大幅2.8cmの有茎鎌である。茎部は途中で折れている。鎌身部は長三角形である。

17は鉄刀である。刀身部の一部のみが残る。部分的な遺物である。現存長は11.9cmで断面は長三角形を呈する。

18は刀子である。刀身部の一部のみである。大きさから刀子と考えられる。現存長6.8cm。断面は長三角形を呈する。

19は耳環である。玄室床面より出土した。環形は横長の円形をなす。長径 2.8 cm、短径 2.5cm、断面径 7 mm である。銅芯は中実である。表面は全体に銀色を呈しているが、一部金色を呈する部分も残されている。

この耳環については元興寺文化財研究所の渡辺智恵美氏・菅井裕子氏・中越正子氏より貴重な分析結果をいただいた。

22は留金具である。方形をした馬具の鉄製留金具である。大きさは 2.4 cm × 2.5 cm。厚みは 0.5 cm である。鉢を打ちつける穴が 3箇所あいている。鉢の頭部はすでに失われている。

第3項 玉類

20はガラス小玉である。色調は緑がかった濃青色である。長さ約 6mm、最大幅約 5.5mm、孔径は約 3mm である。上下は平坦に仕上げている。1点のみ玄室内から出土した。

21は棗玉と思われる。胴が張るが、形状はややいびつである。色調は明緑灰色で、碧玉製と見られる。長さ約 14mm、最大幅約 7mm、孔径約 3mm である。玄室内より出土。

第5章 奥新田西遺跡出土耳環の自然科学的調査

(財)元興寺文化財研究所

1.はじめに

奥新田西遺跡から出土した耳環1点について、顕微鏡による観察やケイ光X線による定性分析等、自然科学的な調査を行う機会を得たので結果を報告する。細部の観察には実体顕微鏡を用いた(オリンパス社製:SZH-IILD)。素材の成分分析は、エネルギー分散型ケイ光X線分析装置(セイコーアイソツルメンツ(株)製:SEA5230以下、XRFと略す)を用いた。この機器は、試料の微小領域にX線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有のケイ光X線を検出することにより元素を同定するもので、非破壊で調査を行うことができる。測定条件は以下の通りである。

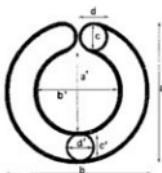
- ・モリブデン管球使用、大気条件下、コリメーター0.1mm、管電圧50kV

2.耳環の観察および分析結果

それぞれの耳環の残存状態、外観的特徴、分析結果について以下に記す。耳環の各部分の呼称については図1に、分析箇所は写真1-a, bに、またXRFスペクトルは図2~5、耳環の法量は表1にそれぞれ示した。

表1 耳環の法量(単位はmm)

重さ(g)	a	b	a'	b'	c	d	c'	d'
15.1	25.5	29.0	13.5	17.0	5.0	7.0	7.0	7.0



耳環は芯を持つ「中実」タイプで、部分的に表面層の剥落やめぐれあがりが認められ、芯が露呈している。表面層は全体的には銀色を呈するが、薄い金色を呈する部分もわずかに残存する(写真2)。接面は側板を折り曲げ、たたみ込んで仕上げている(写真5)。接面間はやや空隙が大きく、物理的原因(引っ張り等)に起因するものと考えられる。また環中央部付近(分析箇所⑤)に環に対して垂直方向の疵が認められる。顕微鏡による観察(写真4)では、痕跡は表面層の上から三角形の断面を持つ鋭利な工具等でつけられたものと推定できるが、疵の発生した時期については特定できない。

XRFでは、表面層(分析箇所①、②)から銀(Ag)、金(Au)、銅(Cu)、水銀(Hg)、ヒ素(As)を検出した(図2、3)。表面層のめぐれあがった部分(分析箇所③)の裏側からは上記元素のほかに鉄(Fe)も検出されたが、主として銀と銅とを検出した(図4)。また芯部(分析箇所④)からは主として銅、ヒ素を検出したが若干の銀、鉄も検出した(図5)。鉄は土壤に由来するとみられる。

以上の結果より、この耳環はヒ素、銀を含有する銅芯の上に銀の薄板を巻き、①アマルガムにより鍍金を施した、②水銀を使用して金箔を貼る、のいずれかの方法で製作されたと考えられる。

(菅井裕子 中越正子 渡辺智恵美)

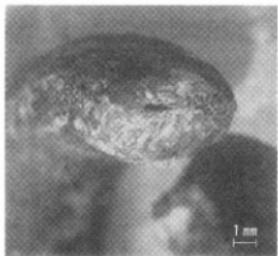


写真 5-a 接面

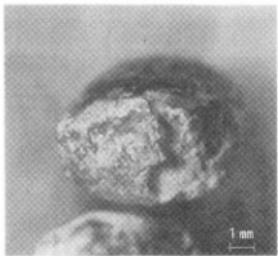


写真 5-b 接面

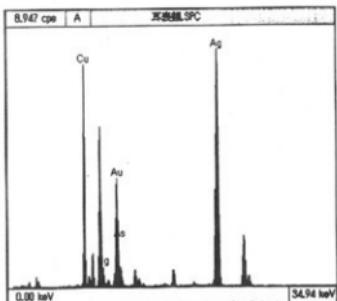


図 2 ①の XRF スペクトル

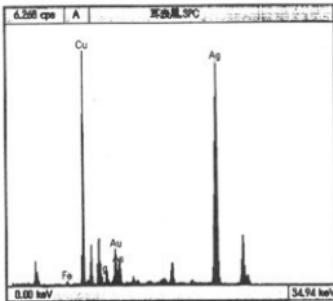


図 3 ②の XRF スペクトル

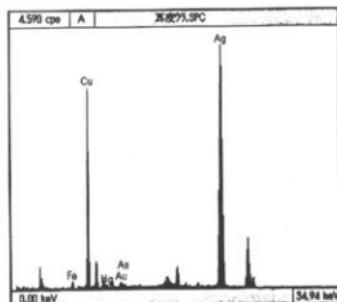


図 4 ③の XRF スペクトル

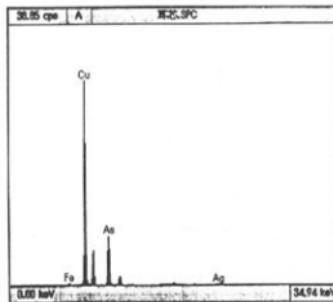


図 5 ④の XRF スペクトル

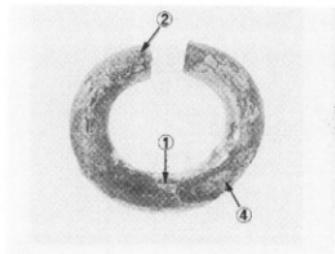


写真 1-a 分析箇所

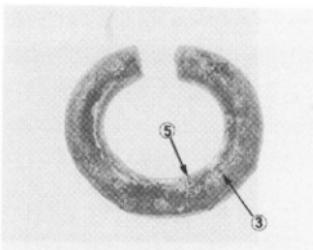


写真 1-b 分析箇所

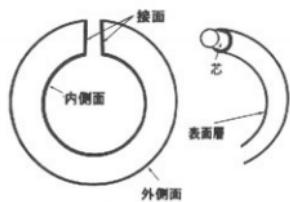


図 1 各部分の呼称

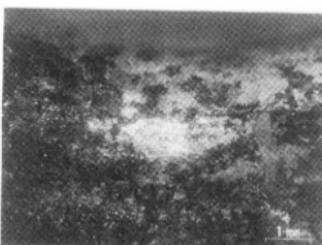


写真 2 ①の拡大

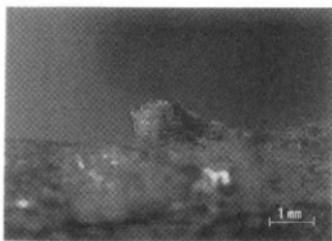


写真 3 ③の拡大



写真 4 ⑤の拡大

第6章 まとめ

1. 墳丘と遺物出土状況

奥新田西古墳は標高約56mの小丘陵上に占地し、土取りにより大きく墳丘を削り取られていたが、調査の結果、15m程度の円墳と推測された。周溝は土取りの影響で墳丘下の南側と東側で検出された。内部主体は右片袖式の横穴式石室で、西側(28°N)に向けて開口していた。玄室長約3.5m、玄室奥壁幅約2.2~2.3m、玄室高約3.1m、羨道長は現存で約1.3~1.5m、羨道幅も約1.4mである。葺石・列石・埴輪等はまったく伴わなかった。

石室内は搅乱を受けており、遺物はすべて破片で、完形のものはない。床面直上より少し高い位置で多く出土した。須恵器の他、耳環・ガラス玉・鐵鎌・鐵刀・刀子・留金具も各1個体出土しているが、原位置をとどめている可能性は非常に少ないと考えられる。

床面上からは棺台に使用されたと考えられる石材が数個出土しているが、原位置を失っているため、棺の配置を復元することはできなかった。また、埋土中からは中世の土師器や瓦質土器なども出土しており、再利用が行われたことがうかがわれる。この時期の埋土には焼土面が形成されている。

2. 築造時期の検討

まず、出土遺物の大半を占める須恵器の検討から、当古墳の造営時期を探ってみたい。

坪蓋は形態から2種類に分けられる。1は口縁端部に内傾する段をもつ。2は口縁端部を丸く收めている。1の口縁端部には古い様相がうかがえるが、外面の沈線はすでに無く、その点、後出の要素が強いといえる。

坏身は5点出土しているが、径の大きさや立ちあがりの高さなどに類似性が強く、時期差は感じられない。3の身は1の蓋とセット関係になると考えられる。3の身は底部外面に回転ヘラケズリを施しているが、その範囲は1/3程度である。

提瓶は口縁端部を丸く仕上げており、また、小型で突起をもたないなどの点で後出の要素が強い。しかし、蓋坏の年代感から大きく外れるものではなく、同一時期の所産と考えて良いと思われる。

高坏は長脚1段透かしである点がやや古い感じもするが、永井信弘氏編年でも、この土器が6世紀後半に残ることが指摘されており、他の器種との間に年代的な矛盾は指摘できない。

脚付長頸壺も6世紀後半に陶邑などで焼かれており、他の器種と時期的な差異はないと思われる。

以上のような須恵器の特徴から、これらは青山7号窯跡出土資料などとの併行関係が考えられ、永井信弘氏編年のⅡ期3小期、陶邑編年ではおおむねM T 85期に該当すると考えられる。実年代では、6世紀後半(第3四半期)に比定できるだろう(1)。金属器や玉類などもおおむね、この年代観と矛盾しないと思われる所以、当古墳の築造時期も6世紀後半に比定できる。

後続する土器形式を設定できないことや、全体に遺物の出土量が少ないとからも、使用期間は短いと思われる。追葬期間も特に設定できない。

3. 奥新田東古墳群との関係

この古墳から県道を隔てて、東側に奥新田東1・2号墳が造られている。山陽自動車道の建設工事に伴い兵庫県教育委員会による発掘調査が実施され、1号墳は直径10m、2号墳は12mの円墳であることが判明した。内部主体はともに横穴式石室で、1号墳は両袖式、2号墳も玄門部に立石を使用して袖石を意識しているが、袖として顕著な狭まりは認められないものであった。残りの良かった2号墳の石室からは、組み合わせ式家形石棺の底石と自然石を利用した組み合わせ式石棺が検出された。組み合わせ式石棺のほとんどは、石室内に安置された2基の石棺と側壁石との間に立石をして造った簡単な構造で、合計9基もの埋葬施設が発見された。その報告によれば、これらの石棺のほとんどは規模が非常に小さく、改葬と考えられるものであるという。築造時期は両墳とも7世紀代であり、2号墳は7世紀後半と推定された。(2)

また、両墳の周溝は一部重なっており、1号墳の周溝は2号墳の周溝が埋まってから掘削されたことも判明したという。

その結果、奥新田西古墳とは築造時期にかなりのズレがあることが明らかとなった。他に破壊された古墳が近辺に存在した可能性もあるが、現状からは立地点の差異なども考慮すると、両者の築造を連続したものとは考えず、断絶していた時間があったと想定したい。また、現時点では他の古墳の築造を想定できないので、奥新田西古墳は短期間の使用ながら、当地点における造墓集団が最初に築造した古墳と考える。

4. 横穴式石室について

当古墳の中で注意を引く横穴式石室について少し見てみたい。右片袖式長方形プランの横穴式石室であるが、玄室長約3.5mに対して玄室奥壁幅約2.2mと横幅の広い平面プランである。立面を見ると、側壁及び奥壁の石材には比較的小振りの石を多く使用し、多段に積んでいる。また、4段目以上ではせり出しによる持ち送りが見られ、羨道高以上では持ち送りは強くなる。感覚的であるが羨道が高さ、幅とも比較的大きい。

見上げ石は数段積み上げ前壁構造をなしている。また、それにより玄室天井を高くしている。見上げ石下段は大型の石材であるが、その上は側壁が迫るため、小さい石材である。最上段は両側から斜めに渡して闊を消している。右袖部と前壁が接する部分には両方にまたがる石材があり、それが上方まで認められる。前壁と側壁は同時に並行して積み上げられたと思われる。

持ち送って玄室を高くするため天井幅も狭くなり、天井石も比較的小ぶりとなっている。また、奥壁は上部を欠いているので、はっきりと言えないが、残存個所では巨石を使用せず、小型の石材のみを使用している。奥壁と接する側壁石も右側壁4段目より上と左側壁2段目より上に斜めに渡す石材が見られる。

このように各部に特徴のある積み方があって注意される石室である。これは天井を高くする目的をもっているものと思われる。奥壁上部と天井の奥部が残らないが、奥壁も持ち送って積んでいれば天井部もより狭くなり、穹窿式タイプの石室となると思われる。しかし、側壁の丸みが少ないとやや大きい石を使うことなどは時期的な問題と関係あるのであろうか。

当古墳の近隣には古い石室もいくつか存在しているのであわせてとりあげてみたい。

近辺では平荘湖古墳群中の池尻19号墳が比較できる規模でやや古い石室としてあげられる。この古墳は平荘湖でも早い横穴式石室で、片袖式長方形となり平面プランは玄室長3.45m、同幅約2m～2.2m、羨道幅1.48m、同長1.05mとなる。奥新田西古墳の玄室長約3.5m、同幅約2.2m、羨道幅は約1.4mとよく似た数値となっている。羨道長も近い数字であるが、現存長なのではっきりとはしない。時期的にみれば、池尻19号墳はほぼTK10に近い墳とされている。地理的に見て奥新田はこの古墳から北へ約5kmと近距離にある。石室の下部しか残らないが、報告書『印南野』の記述では玄室に一部せり出しがあり、持ち送りの強い石室となると推測している点は注意される。(3)

図面では側壁や奥壁には一部大きな石材も使用されている点などは奥新田とは少し違う部分もあるようである。この古墳は左片袖であるが、平面各部の数値がよく似ている点などは注意される。

加西市の例では、平成5年に兵庫県教育委員会が発掘調査した状覚山4号墳は6世紀前半築造の直径約9mの円墳とされ、導入期の石室と見られる。石室は右片袖式で玄室長約3m、玄室幅約2m、玄室比1.5となる石室である(奥新田玄室比約1.6)。羨道幅は約1mとなり、同長は約4.5mである。玄室が幅広の長方形で右片袖式となる点は奥新田と似ている。羨道幅は奥新田よりすこし狭くなっている。基底部しか残らないため、立面の比較はできない。

この古墳は当墳から北へ約2kmと近い距離にあり、気になる存在である。

近隣に、早い時期で幅広の長方形片袖式横穴式石室は存在する。しかし、石室上部がないことなどもあり、完全な比較はできないものが多い。この点は今後の課題としたい。

以上、当古墳の特徴と思われた横穴式石室について半端ながら考えられることを述べた。

以上でまとめを終わりたい。本来考察すべきであった背景となる集落との関係などは考察できなかった。平荘町北部の谷には 1~3 基程度の小群集墳が点在している。谷には古墳時代後期の集落が点在していて、それが造墓主体となって首長の死を契機に古墳を営んだのかも知れないが、現状では当地域の集落遺跡が未確認なので、具体的な考察は行うことが出来ない。この点も今後の課題としたい。

この稿を書く上で、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所の岸本一宏氏及には、穹窿形横穴式石室および須恵器などについて多くの教示をいただいた。

また、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所の中村弘氏からも横穴式石室の特徴などについてご教示をいただいた。

そして、加西市教育委員会の永井信弘氏からは須恵器に関して多くのご教示をいただいた。

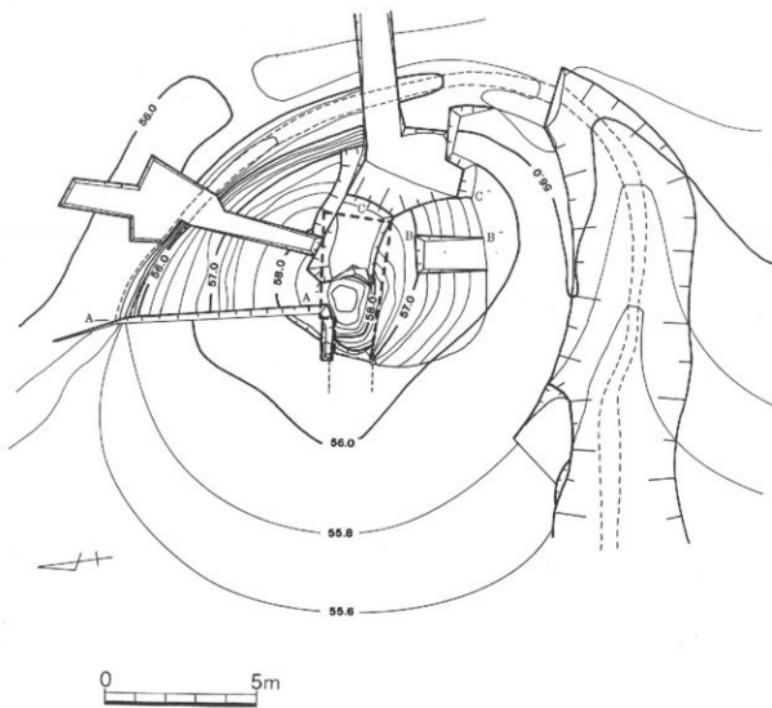
末尾ながら記して感謝します。

注

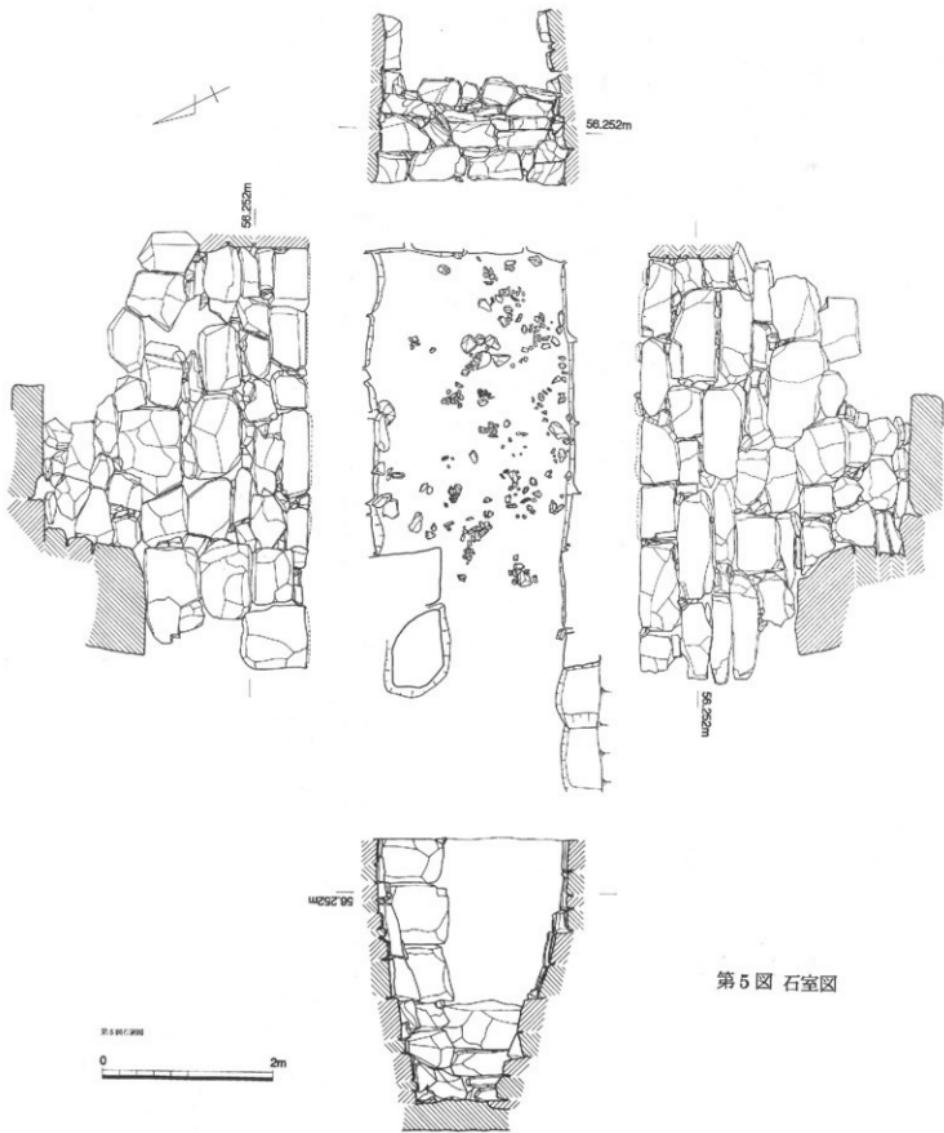
- (1) 永井信弘 1995 年「播磨における古墳時代須恵器の変遷」『小谷遺跡第 6 次』 加西市埋蔵文化財報告 27
- (2) 岸本一宏・高木芳史 1996 年 「奥新田東古墳群」『平成 7 年度年報』
- (3) 島田清・上田哲也 1965 年「印南野」加古川市教育委員会

参考文献

- 岸本一宏 1994 年「播磨国風土記と渡来文化」『播磨国風土記の考古学』 同成社
加古川市史第 4 卷 1996 年 加古川市
河上邦彦 1995 年 「後・終末期古墳の研究」 雄山閣出版

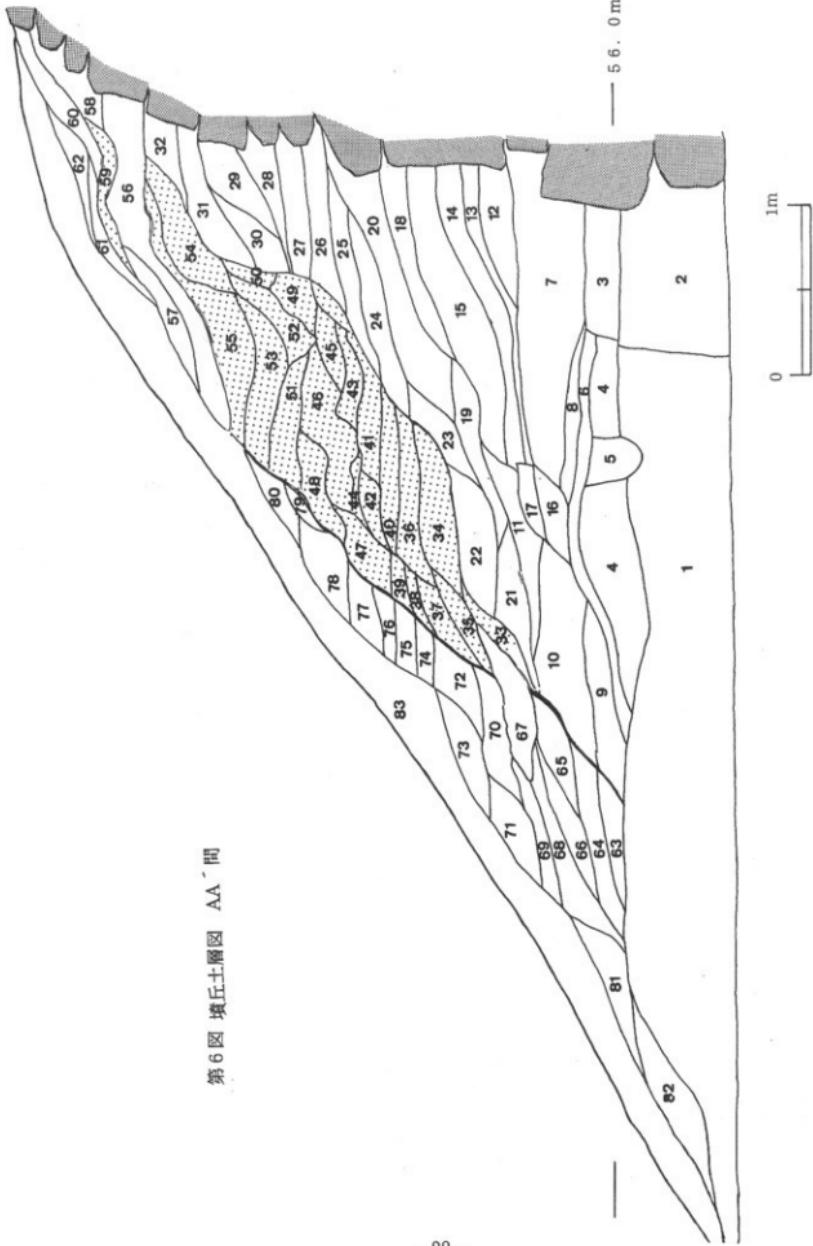


第4図 墳丘全景実測図

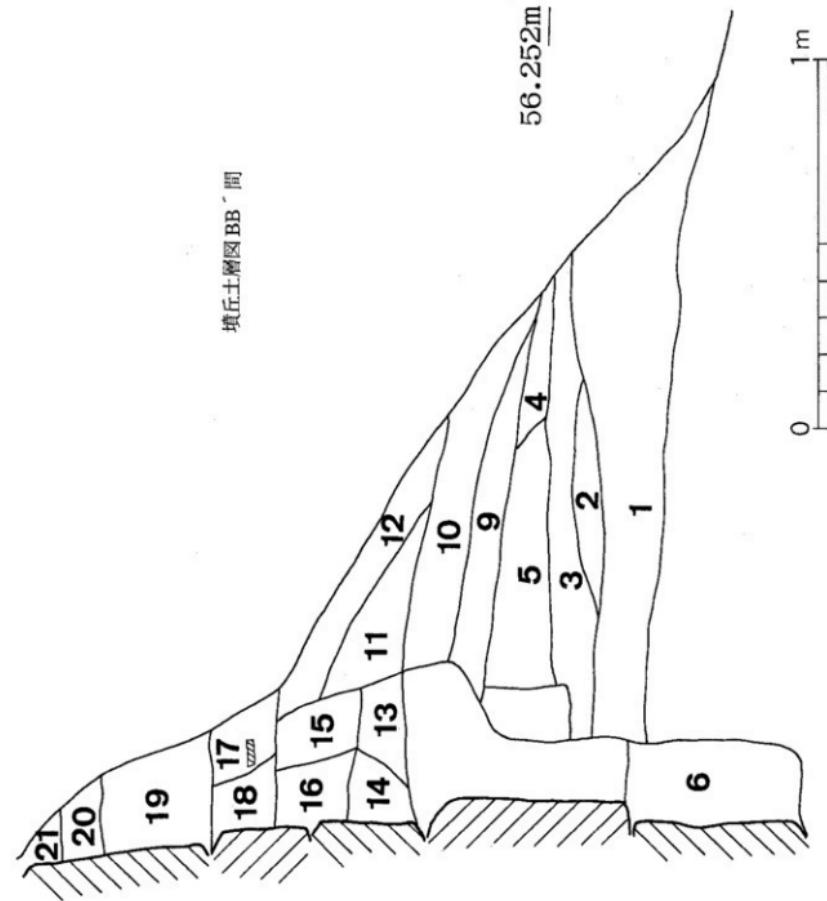


第5図 石室図

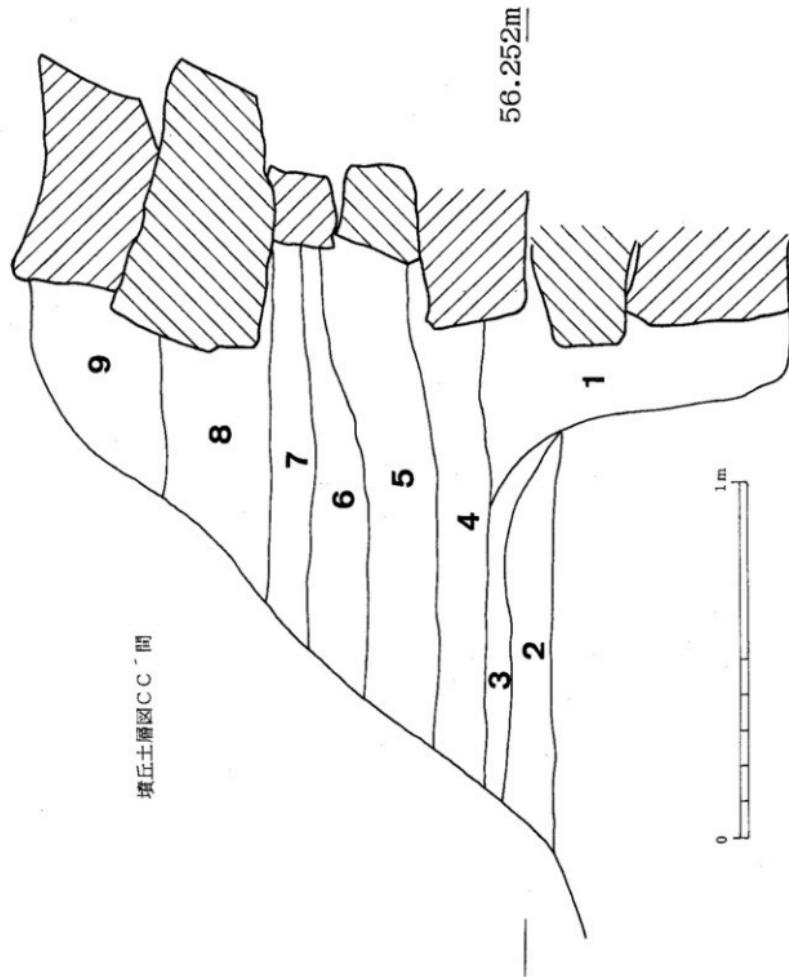
第6図 墓丘土層図 AA'間



墳丘土層圖 BB "間"



填丘土層圖 C C' 間



AA' 間土層図注記

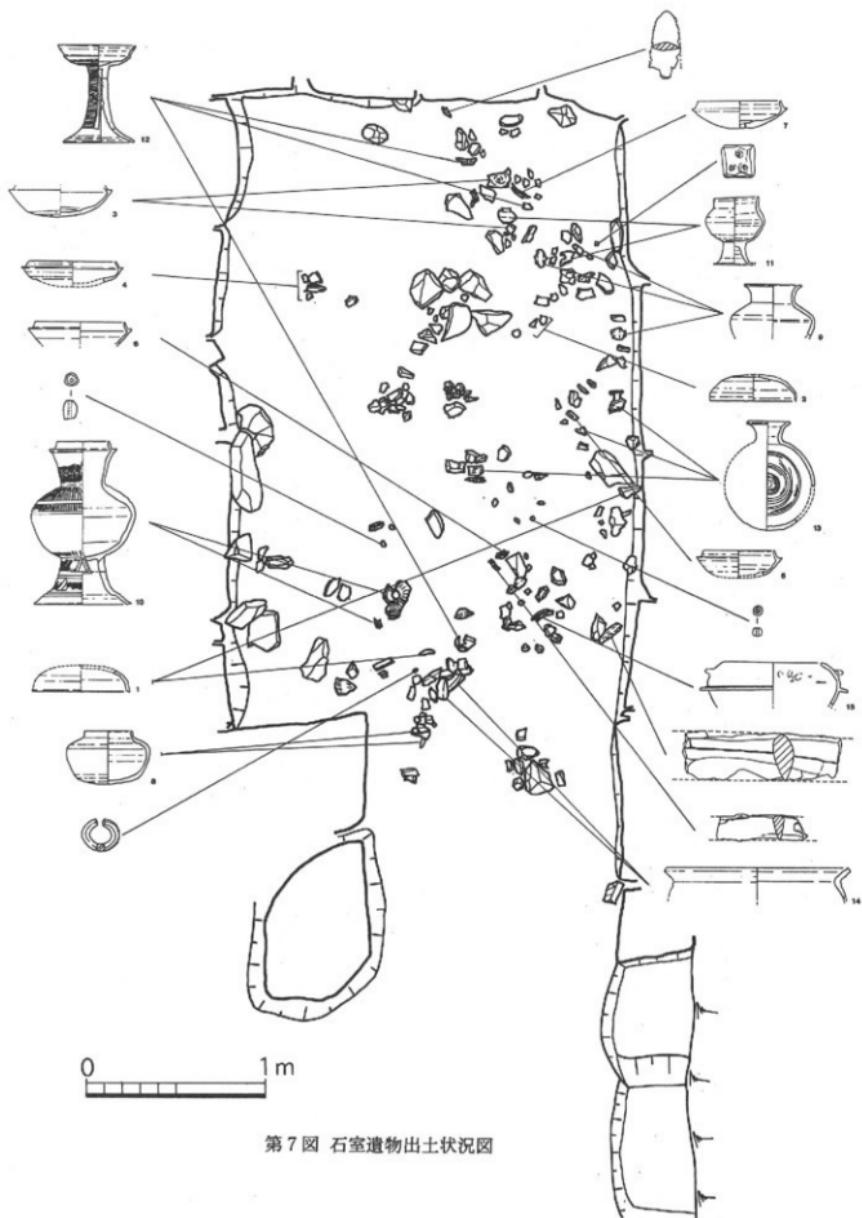
1 黄褐色粘質土混じり白色シルト質細砂	6 灰黄色細砂
2 灰色砂質土	7 灰色粘質土混じり黄褐色粗砂
3 淡黄色粗砂	8 明黄褐色細砂
4 明黄褐色細砂	9 にぶい黄褐色細砂
5 淡黄色細砂	10 明黄褐色細砂
11 黄褐色粘質土	16 淡黄色細砂
12 灰色砂質土	17 黄褐色粘質土
13 黄褐色細砂	18 にぶい黄褐色細砂
14 明黄褐色粘質土	19 にぶい黄褐色細砂
15 黄褐色砂質土	20 にぶい黄褐色細砂
21 黄褐色中砂(地山土多く混じる)	26 明黄褐色中砂
22 淡黄色細砂(旧表土多く混じる)	27 明黄褐色細砂
23 明黄褐色中砂(旧表土、地山土混じる)	28 黄褐色細砂
24 褐灰色細砂	29 明黄褐色細砂
25 明黄褐色細砂	30 褐灰色細砂
31 明黄褐色細砂	36 明褐色中砂
32 黄褐色細砂	37 褐灰色細砂
33 褐灰色細砂	38 褐色細砂
34 明褐色細砂	39 灰黄褐色細砂
35 褐灰色細砂	40 褐灰色細砂
41 灰褐色細砂	46 にぶい黄色中砂
42 褐灰色細砂	47 灰黄褐色中砂
43 灰黄褐色細砂	48 褐灰色細砂
44 灰褐色細砂	49 褐灰色細砂
45 灰褐色細砂	50 灰黄色細砂
51 褐灰色細砂	56 明黄褐色中砂(地山土含む)
52 にぶい黄灰色	57 明黄褐色細砂
53 灰褐色細砂	58 明黄褐色細砂(地山土含む)
54 褐灰色細砂	59 褐灰色細砂
55 灰褐色細砂	60 明黄褐色細砂(地山土含む)
61 黄褐色細砂(旧表土含む)	66 淡黄色細砂(旧表土含む)
62 黄褐色細砂(地山土含む)	67 木の根のカクラン
63 明黄褐色細砂	68 黄褐色細砂(旧表土含む)
64 にぶい黄褐色細砂	69 灰黄色細砂
65 黄褐色細砂	70 明黄褐色細砂
71 黄褐色細砂(旧表土含む)	79 黄褐色粗砂
72 明黄褐色細砂	80 にぶい黄褐色(旧表土含む)
73 明黄褐色細砂	81 黄褐色細砂
74 黄褐色細砂(旧表土含む)	82 明黄褐色細砂
76 明黄褐色細砂(旧表土含む)	83 黄色砂質土(表土)
77 黄褐色細砂(地山土含む)	
78 淡黄褐色粗砂	

BB' 間土層図

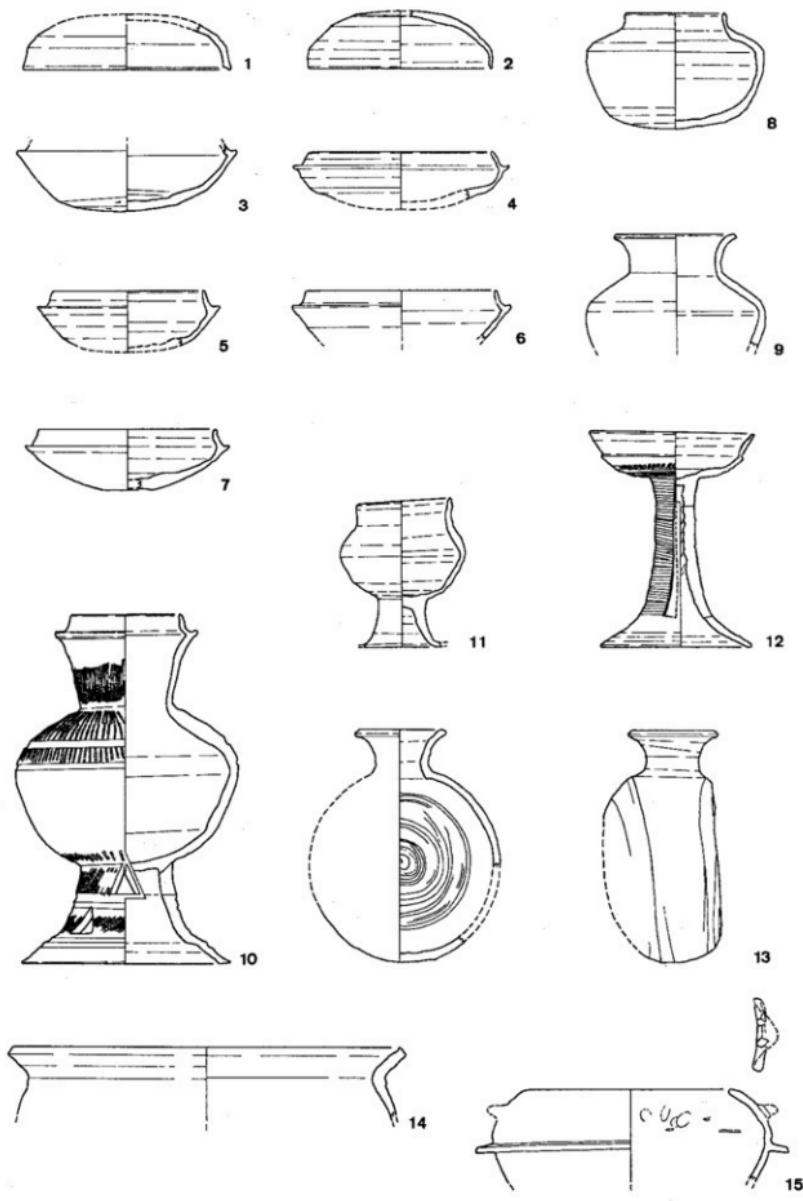
1 旧表土	11 明黄褐色砂質土
2 灰黄褐色砂質土	12 にぶい黄褐色砂質土
3 橙色砂質土	13 褐灰色砂質土
4 黄褐色砂質土	14 明褐色砂質土
5 にぶい黄褐色砂質土	15 にぶい黄褐色砂質土
6 棕色砂質土	16 灰白色砂質土
7 にぶい黄褐色砂質土	17 灰色砂質土
8 明黄褐色砂質土	18 灰白色砂質土
9 淡黄褐色砂質土	19 棕色砂質土
10 明黄褐色砂質土	20 褐灰色砂質土
	21 棕色砂質土

CC' 間土層図

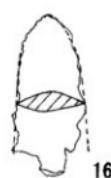
1 地山土を詰めた層(墓壙内埋土)	6 黄褐色土まじり灰色砂質土
2 旧表土層	7 灰色砂質土
3 灰色砂質土	8 黄褐色砂質土
4 淡黄褐色砂質土	9 黄褐色砂質土
5 灰色土まじり黄褐色砂質土	



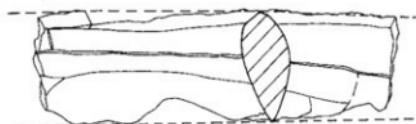
第7図 石室遺物出土状況図



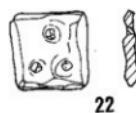
第8図 出土遺物実測図



16



17



22



18



19



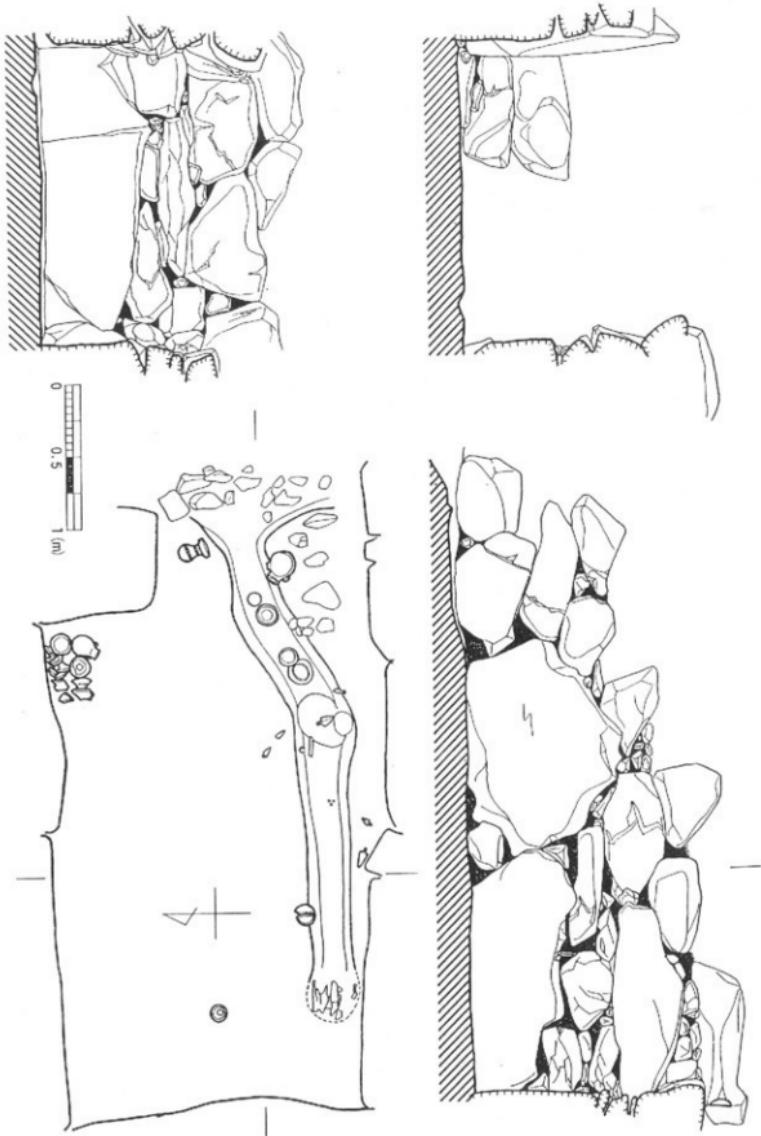
20



21

第9図 金属・玉類実測図

種類	番号	器種	法量(cm) 口径×器高 底径	色調 外面 内面	残存度	その他の
須恵器	1	坏蓋	14.9×3.3	灰色 灰色	口縁 1/3	
	2	坏蓋	13.4×4.1	明青灰色 暗紫灰色	口縁 1/8 以下	
	3	坏身	...×4.9	灰色 灰色	体部 1/2	
	4	坏身	13.4×3.4	青灰色 赤灰色	口縁 1/4	
	5	坏身	11.0×3.9	灰色 灰色	口縁 1/5	
	6	坏身	13.8×3.6	灰白色 灰白色	口縁 1/8	
	7	坏身	12.8×4.4	灰色 灰色	口縁 1/4	
	8	脚付短頸壺	7.1×8.3	灰色 灰色	口縁 1/3	
	9	壺	8.4×7.1	灰色 灰白色	口縁 1/4	
	10	脚付長頸壺	7.9×25.6×14.9	灰白色 灰白色	口縁 1/2	
	11	台付壺	6.8×10.8	灰色 灰色	口縁 1/3	
	12	高坏	11.8×15.6×10.8	灰白色 灰色	底部 1/3	
	13	提瓶	6.0×16.8	灰色～灰オリ ーブ 暗紫灰色	口縁部完形 体部 1/2	
土器	14	壺	28.2×5.2	浅黄橙色 にぶい黄橙色	口縁 1/4	胴部タタキメあり。
	15	羽釜	14.5	灰黒色		炭素付着、瓦質とも 考えられる。



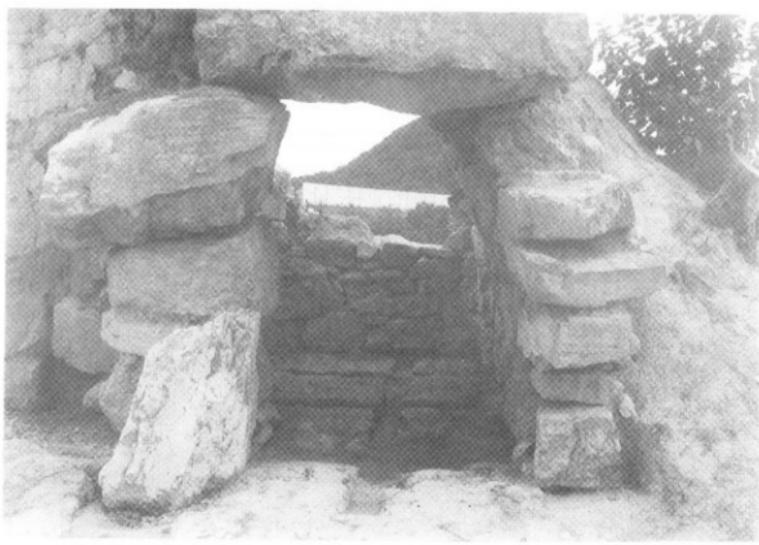
池尻 19号 墳石室実測図（印南野 2 より）



調査地遠景（北より）



調査前古墳全景（西より）



石室開口部



調査風景



完掘状況



墳丘断ち割り状況（南より）



墳丘北側状況



墳丘東側状況（奥壁側）



見上げ石



奥壁



奥壁裏側



玄室高（東側より）



袖石



右側壁



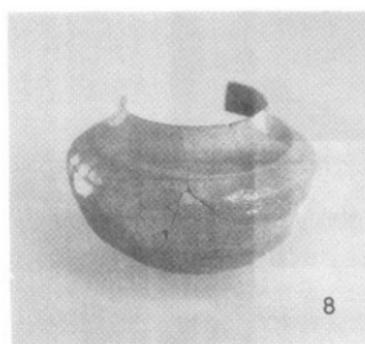
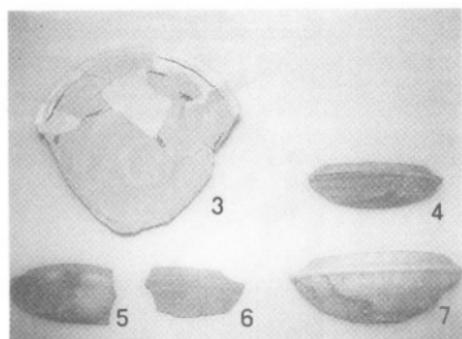
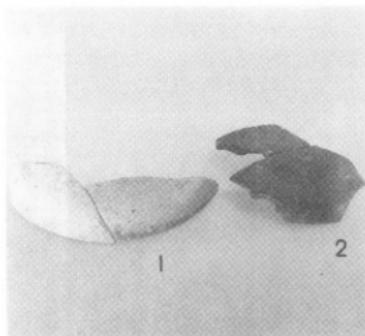
左側壁

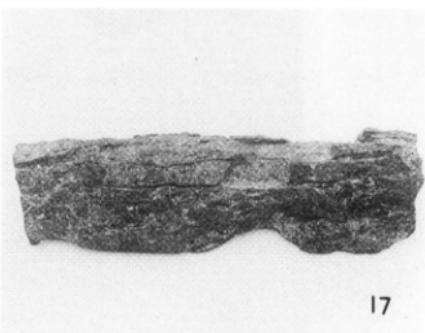
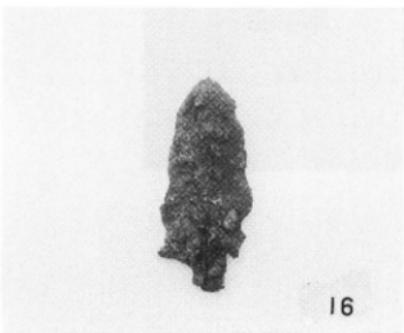
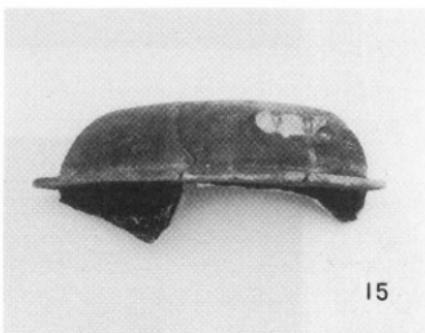
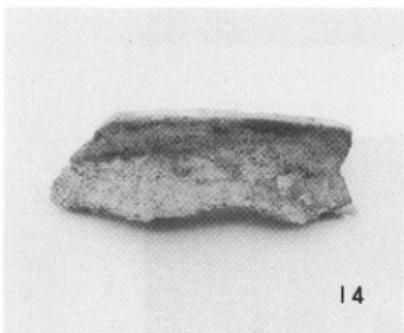
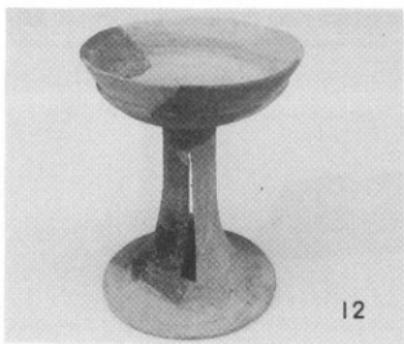


天井石



天井石







18



19



20 21



22

報 告 書 抄 錄

フリガナ	オカシテンニシヨンハツクチヨウサホコクシヨ							
書名	奥新田西古墳発掘調査報告書							
シリーズ名	加古川市文化財調査報告							
シリーズ番号	13							
編著者	西川英樹							
編集機関	加古川市教育委員会							
所在地	加古川市加古川町北在家 23-1							
発行年月日	平成 12 年 12 月							
所収遺跡	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
奥新田西古墳	兵庫県加古川市平莊町中山 896~905-1	市町村 28210		34° 50' 0"	134° 52' 50"	平成 9 年 2 月 17 日 ~ 4 月 20 日	400 m ²	駐車場建設工事
所収遺跡名	種別	時代	遺構	遺物				
奥新田西古墳	古墳	古墳時代後期	古墳 1 基	須恵器、鉄鏃、鉄製刀類、鉄製刀子、鉄製留金具、耳環、ガラス小玉等				

加古川市文化財調査報告書 13

奥新田西古墳発掘調査報告書

発行日 2000年12月25日
編集・発行 加古川市教育委員会
加古川市加古川町北在家 23-1
TEL (0794) 21-2000 (代)
印 刷 稲垣印刷
加古川市野口町古大内 451-1